

第369号

2019年
12月25日
月1回25日発行

げんぱつ

原発住民運動情報

発行所 原発問題住民運動全国連絡センター
発行人 中村敏夫/1部300円 年間3,000円
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町 2-11-13
MMビルII 402
TEL 03-5215-0577 FAX 03-5215-0578
郵便振替 00150-7-355202
ホームページ http://genpatu.com/index.html
メール=genpatu-c@bizimo.jp

言明の環境

世界が感動した吉野講演

小泉演説に「化石賞」

ノーベル化学賞を受賞した吉野彰・旭化成名誉フェロー(71)は十二月八日、ストックホルム大学で受賞記念講演を行い、「技術革新によって、持続可能な社会が間もなく訪れる。リチウムイオン電池が中心的役割を担うだろう。これが私の世界へのメッセージだ」と強調した。

吉野さんは「リチウムイオン電池の開発経緯とこれから」と題して約三十分講演。受賞理由となったりリチウムイオン電池について、一九八一年、旭化成で研究をはじめ、負極に炭素材料を使う基本特許を申請した流れを説明。発火や爆発が起こらないことを示す実験の映像を示し、「安全性は不可欠。これがリチウムイオン電池が生まれた瞬間だ」と説明。自身の研究が八一年化学賞を受けた福井謙一さんの「フロンチア軌道理論」、二〇〇〇年に化学賞を受けた白川英樹さんの「電気を通すプラスチック」の研究の延長上にあり、今年を受賞者と合わせ八人となること

から「リチウムイオン電池はノーベル賞受賞者八人に支えられた幸せ者だ」と話し、笑いを誘った。受賞理由の小型軽量のリチウムイオン電池は、高出力で繰り返し充電可能で携帯電話、ノートパソコンなどに搭載され、IT革命の土台を支え、世界の人のびとの生活スタイルを一変させた。今後、リチウムイオン電池は、太陽光など再生可能エネルギーの電気をためることで化石燃料の使用を減らし、地球環境問題の解決に役立つことが期待される。吉野講演は世界の感動を呼ぶ。吉野さんはIT革命のようにエネルギー分野でもET(エネルギー・テクノロジ)革命が起きると主張してきた。

一方、小泉進次郎環境相は十二月十一日、スペインのマドリードで開催中の国連気候変動枠組条約第二十五回締約国会議(COP25)に初めて公式の演説に臨んだ。夢破れても猪突猛進「日本の「高速炉開発」(二面)」「国の責任を免責の不当判決 山形地裁(三面)」「ローマ教皇「核兵器廃絶」訴え「広島、長崎訪問(五面)

だが、演説では「脱石炭」は官邸を説得できず見送りとなった。環境省の事務方は演説文案を十一月中旬に示したが、石炭火力への言及は一言もなかった。小泉氏は「これでは世界が納得しない」と経産省との再調整を指示。途上国で需要があるとして平行線。小泉氏も非公式に官邸幹部に見直しを打診するも官邸が首を振ることはなかった。

「五〇年までに温室効果ガスの実質排出ゼロ」を表明した自治体は就任前には東京都、京都市など四自治体だったが、三重県など新たに表明し、二十八自治体が増えた。演説では「人口でカリフォルニア州を超え、スペインの約四千万七百万人に迫る」と、日本全体の削減についてアピールした。

世界の環境NGOでつくる「気候行動ネットワーク」は、演説後、日本に今回「二度目の「化石賞」を授与すると発表。小泉演説が脱石炭などの意思を示さないことを主な理由とした。

世界の賞賛を浴びるリチウムイオン電池を、環境対策に生かさない日本の政治が問われる。



●ノーベル化学賞受賞の吉野さんは、受賞理由となったリチウムイオン電池が、持続可能な世界の現に大きな役割を果たすことを、受賞スピーチで訴え、世界に感動を呼んだ。一方、COP25で初めて公式演説をした小泉環境相は、脱石炭の意志を示さなかったとして「化石賞」を授与された。●同じ日本人なのに、この両者の発言の明暗には驚かされる。本来なら、日本政府が、吉野さんのリチウムイオン電池の成果を、世界の環境問題の解決にどう生かすかについて、率先して政策化する責務がある。そして、COP25で率先して訴えるのが筋である。そうしておけば、小泉環境相演説が世界の鑿鑿を賣うことはなく、むしろ、環境先進国の評価を得られたに違いない。●今回の吉野さんの世界的に優れた発見を、日本政府は知るよしもないことを示した。知らないことにはその生かしようもない。ここから日本政府を「認知症」に追い込んでいくものは何か。日本政府が環境問題に背を向けて「原発推進」に血道を上げてきたからである。この「病魔」の克服こそ、最大の急務である。